

## 肺扁平上皮癌気管支転移の一例

国立療養所富士病院呼吸器外科 榊原賢士、小林 哲、平野竜史  
西海 昇、石原重樹、並河尚二

要旨:症例は52才女性。平成9年2月右鎖骨上窩リンパ節腫大を主訴に近医受診、当院紹介され入院。rt.S<sup>10</sup> 原発、低分化扁平上皮癌 cT2N3M0と診断し化学療法、放射線療法を行った。平成10年8月右鎖骨上窩リンパ節に再発し摘出した。平成12年1月脳転移に対して全脳照射。平成13年2月脳転移再発に対してX線照射を行った。平成14年3月定期検査入院。気管支鏡で右中葉支に隆起性病変をみとめた。生検で低分化扁平上皮癌、気管支転移と考え化学療法と放射線療法を行った。

キーワード:肺扁平上皮癌、気管支転移、放射線療法、化学療法

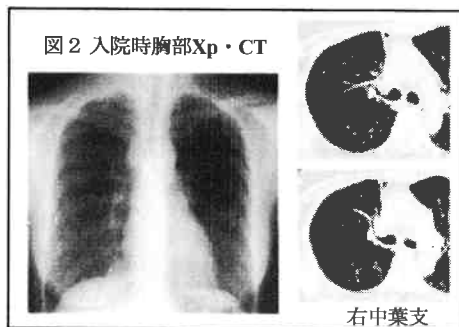
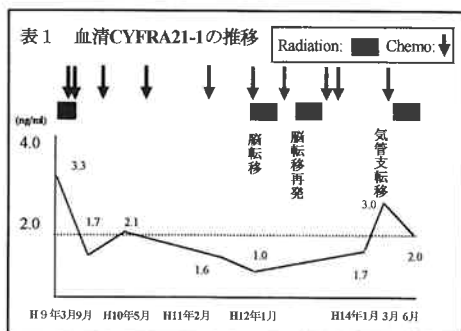
### はじめに

今回われわれは比較的まれな気管支転移の一例を経験したので報告する。

### 症例

症例:52才 女性。  
現病歴:平成9年2月右鎖骨上窩リンパ節腫大、胸部単純レントゲンにて肺癌を疑われ当院紹介。平成9年3月当院rt.S<sup>10</sup> 原発、低分化扁平上皮癌 cT2N3M0と診断  
CDDP120mg+VP-16 100mgx2 2クール、放射線療法(肺野 71Gy 縦隔、頸部 68.4Gy)を行った。評価はPR。平成10年2月化学療法CDDP100mg+VDS3mgx3。平成10年8月右鎖骨上窩リンパ節に再発し摘出を行う。化学療法CDDP100mg+VP16 100mgx2。平成11年5月化学療法CDDP120mg+VDS3mgx3。平成12年1月脳転移を認めたため、全脳照射45Gyを行った。評価

はPR。化学療法CDDP100mg+VDS3mgx3。平成12年10月化学療法CDDP100mg+VDS3mgx3。平成13年2月脳転移再発に対してX線集光照射6MeV 30Gy施行した。評価CR。平成13年6月化学療法CDDP80mg+GEM800mgx2 2クール。平成14年3月定期検査入院。気管支鏡で右中葉支に内腔へ向かう隆起性病変をみとめた。  
入院時現症:身長:155cm 体重55Kg 胸部聴診上問題なし、表在リンパ節触知せず。  
血算、生化学:異常所見なし。  
腫瘍マーカー:CYFRA21-1は、平成9年初回入院時3.3ng/mlと上昇していたが、治療後正常域(2.0ng/ml以下)へ低下した。2002年3月入院時3.0ng/mlと再上昇していた。(表1)



当院初診時レントゲンでは右下肺野に径30mm大の腫瘤影をみとめた。胸部CTでは、右S<sup>10</sup>に大きさ35mmの円形腫瘤が存在し、縦隔リンパ節、右鎖骨上リンパ節の腫脹をみとめた。(図1)

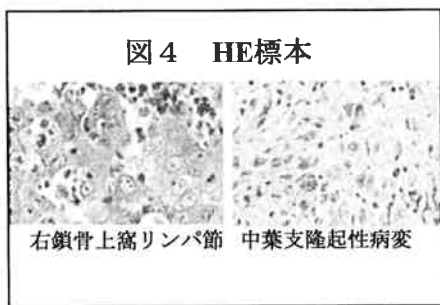
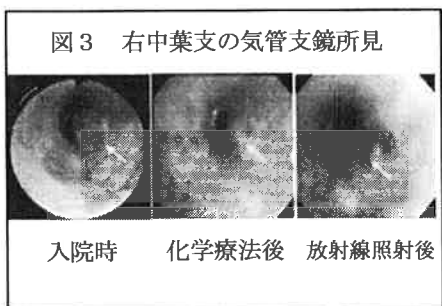


今回入院時無症状であった。レントゲンでは、初診時に腫瘤影が存在した部位は癒痕陰影となっていた。胸部CTでも癒痕化しており、縦隔、および右鎖骨上窩のリンパ節は著明に縮小していた。中葉支周囲のThin slice CTでは、肺内病変はみとめなかった。(図2)

入院時気管支鏡では右中葉支に隆起性病変を認め、生検をおこなった。(図3左)

病理標本:隆起性病変の生検では、低分化扁平上皮癌と診断。初診時の右鎖骨上窩リンパ節生検時と同一組織であった。(図4)

化学療法を1クール(CDDP+VDS)施行したところ、気管支鏡で縮小しているのが確認できた。(図3中)引き続き同部位へ放射線療法を計画した。5年前の照射野内に転移病変が存在することから合併症予防のため放射線の照射範囲を縮小し3門からの照射をおこなった。(図5)2Gy/日で放射線肺臓炎などの障害なく68Gy照射できた。放射線照射後の気管支鏡では癒痕組織となっていた。(図3右)治療後の血清CYFRA21-1は2.0ng/mlと低下した。



### 考察

今回の中葉支の病変は、肺癌の気管支転移と新たな気管支癌の2つの可能性が考えられる。森田ら<sup>1)</sup>の重複癌に関する文献によれば、28年間の剖検例の検討報告で肺癌と気管癌を合併した例は3例のみであり、本例では脳への遠隔転

移をみとめていたことから中葉の気管支病変も重複癌というよりは気管支内転移の可能性が高いと判断した。

治療法に関しては、手術<sup>2)3)</sup>を中心とした積極的に切除するという方針と放射線療法<sup>4)5)6)7)</sup>、化学療法<sup>4)5)</sup>、レーザー治療<sup>8)9)</sup>などの非観血的療法が報告されている。遠隔転移がなく完全切除可能な症例では手術療法が選択されている。しかし、初回治療時より手術適応がなかったため、非観血的な治療法を選択した。

今回の症例では、病変が進行すれば気管支を閉塞する可能性があるためレーザー焼灼を考慮したが、化学療法により病変の縮小をみとめたため、残存病変に対し放射線療法をおこなった。初回治療時の照射野に、今回の病巣がふくまれるため、副作用対策として3門でおこない、問題なく治療を完遂し得た。本症例でも、他の報告例同様、放射線により腫瘍が著しく縮小し、放射線に対し感受性が高いと思われた。

末梢型肺癌の気管支転移の形式については、血行性の遠隔転移(脳転移)、右鎖骨上窩リンパ節転移をみとめたことから、リンパ行性に気管粘膜下にそって転移したと推定している。

### おわりに

肺扁平上皮癌気管支転移の一例に対して化学療法、放射線療法が著効した一例を報告した。

### 参考文献

- 1) 森田豊彦: 肺癌症例と比較した気道癌および気管分岐部癌の頻度と特徴 (後編: 重複癌・他) - 日本病理剖検報 (1958年~1985年) による検討. 呼吸 8:1206-1212, 1989.
- 2) 瀬川正孝, 草島義徳, 中村裕行, et al: 末梢型肺腺癌の術後気管壁内転移. 肺癌 40:63-637, 2000.
- 3) 酒井忠昭, 池田高明, 菊池功二, et al: 肺癌の気管転移の一手術例. 日胸外会誌 34:1178-1181, 1986.
- 4) 三浦隆, 田中康一, 中城正夫, et al: 肺癌術後に気管支転移を認めた3症例. 気管支学 19:422-425, 1997.
- 5) 岡田信一郎, 小林俊介, 稲葉浩久, et al: 肺癌術後2年目に気管転移をきたした肺小細胞癌の一例. 肺癌 31:275-278, 1991.
- 6) 山村淳平, 和久宗明, 小山明, et al: 気管転移をきたした肺小細胞癌の一例. 気管支学 9:72-77, 1987.
- 7) 小栗鉄也, 磯部威, 二井谷研二, et al: 絶対的治癒切除後に気管・気管支転移を生じたI期肺扁平上皮癌の1例. 気管支学 18:33-38, 1996.
- 8) 清水信義, 伊達洋至, 河田真作, et al: 肺癌の気管転移による 気道狭窄に対しYAGレーザーが有効であった一例. 気管支学 9:153-156, 1987.
- 9) 平松義規, 佐々木正人, 木村哲也, et al: 肺癌術後の気管・気管支転移に対する KTP レーザー照射症例. 日呼外会誌 11:749-754, 1997.